

【特集企画】

「体性感覚と老化の生理学～「痛み」を中心に～」について

平成 22 年の国民生活基礎調査によりますと、国民が抱える症状の上位 1・2 位を腰痛・肩こりといった筋骨格系の痛みが占め、その割合は加齢と共に増加することが明らかにされています。高齢者にとって、「痛み」は重要な健康問題のひとつと言えるでしょう。

「痛み」が発生・調節されるメカニズムについての基礎研究は、分子、細胞、組織、システムの各レベルで進められてきました。かつて、「痛み」は耐えるべきものと信じられていた時代もありましたが、近年では「痛み」は適切にコントロールされるべきもの、と考え方が変わってきており、「痛み」に対する理解が進んできたように感じます。一方、「痛み」の加齢変化や病態時の変化についての知見は、まだまだ十分ではないように思われます。それゆえ、高齢者の「痛み」に対する理解が深まったとは、言い難いのが現状と思われます。

そこで本特集では、「痛み」の発生・調節のメカニズムが「老化」や「病態」によりどのように変化するのか、体性感覚、特に「痛み」の基礎研究がご専門の 5 名の先生方に、最近の知見をご提供いただきました。水村先生・田口先生の稿では、骨格筋および筋膜の痛み（侵害）情報を伝える受容器について概説いただき、さらに病態時および加齢による受容器の変化についてご説明いただきます。中川先生の稿では、末梢神経に発現する TRP (transient receptor potential) チャネルが、侵害情報の受容や痛みの慢性化にどのように関わるのか解説いただき、炎症細胞などの非神経細胞に発現する TRP チャネルと慢性痛との関連についてもご説明いただきます。田代先生の稿では、女性の各ライフステージにおける痛みの特徴についてご説明いただき、エストロゲンが侵害情報の伝達・調節のしくみに及ぼす影響についてご説明いただきます。堀田先生の稿では、非薬剤性の鎮痛法の仕組みに関わる疼痛調節系について概説いただき、その機能の加齢変化についてご説明いただきます。

以上のように、痛みと老化・病態をつなぐ他に類を見ない特集になったのではないかと自負しております。ご多用のところ、渾身の玉稿を賜りました著者の先生方に、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。最後になりますが、本特集の結果、「痛み」研究がますます発展し、高齢者の「痛み」の理解が深まり、高齢者の「痛み」ケアの発展へとつながっていくことへの一助となりますことを願っております。

基礎老化研究誌 編集委員

清水 孝彦

渡辺 信博